東日本大震災から４年後の現実：備忘録ないしは切り抜き帳(その16)

[2015年6月6日(土)]

○3.11からすでに４年が経過し，東日本大震災関連の話題がめっきり少なくなってきた．仙台で多くの方が心配しておられたのは「国連防災世界会議が終わったら東日本大震災のことは忘れられて，東北は中央から孤立してしまうのではないか」と云うことであったが，決してそんなことがあってはならない．しかし，東日本大震災や福島第一原発事故の他にも次々と重大な問題が出現してきて，一時も気を許せない状況が続いている．

○6月3日付けの東京新聞社説が伝えようとしているのは，日本年金機構がコンピューターウイルスに攻撃され，年金加入者の個人情報約125万件が外部に流出した問題の重要性であった．同機構の危機管理の杜撰さは今に始まったことではなく，前身である社会保険庁の時代からの悪しき伝統でもあるが，当の社説が危惧しているのは，流出した情報が悪質な勧誘ビジネスや詐欺事件に利用されると云う直接の心配に止まらない．それはいつの間にか政府によって*粛々*と進められようとしている“マイナンバー制度”への不安である．不人気で消滅したかに思われた“住基ネット”が，大多数の国民が知らぬ間に，形を変えて着々と準備されていたとは非常に不気味なことではないか．もし，今回の年金情報流失事件が起こっていなかったら，果たしてマスメディアは“マイナンバー制度”の危険性について，きちんと我々に伝えてくれただろうか．

○斎藤美奈子氏は東京新聞“本音のコラム”の常連の一人で水曜日を担当されている．右のコラムは『事態』という一つの言葉を巧みに操って“安保関連法案”の愚を揶揄したもので，しかも，大変わかりやすい．まさに文芸評論家の面目躍如と云ったところではないだろうか．そう云えば，以前に読ませて頂いた同氏の『文章読本さん江』にも同種の気風を感じたことを思い出した．

○6月6日付けの東京新聞１面“筆洗”では，同じく“安保関連法案”の愚を『自動販売機』を用いて揶揄している．自動販売機が論理的でなくては困るのと同じように(あるいはそれ以上に)法律も論理的でなくては困る．当然のことではないだろうか．右の文中には「条文を読んでも判断できない場合は解釈で明確にする必要がある」とのことであるが，もちろん，

5 社説・発言 ＊11版S 2015年(平成27年)6月3日(水曜日)

年金情報流出

年金加入者の個人情報約百二十五万件が外部に流出した。日本年金機構へのウイルスメールが原因である。今年十月から全国民に付番が始まるマイナンバー制も標的にならないか不安がさらに募る。

マイナンバーが不安だ

「厚生年金基金制度の見直しについて」と件名がついたメールだったという。日本年金機構の複数の職員が少なくとも十数件受信し、開封したため、数十台のパソコンがウイルスに感染し、外部者から不正アクセスを受けた。

「その業務に就いている職員が開封しても仕方がないようなメール」だったと同機構は弁明するが、危機管理が本当に徹底していたのか疑問が大きい。猛省がいる。このような不正アクセスの手段は、むしろ一般的だからだ。しかも、先月八日から十八日まで断続的にメールが送られていた。警察に相談したのは十九日のことで対応が遅すぎる。情報管理の在り方を一から考え直すべきである。

流出したのは、年金記録を管理する基礎年金番号と氏名、生年月日、住所である。深刻なプライバシー侵害事件と受け止めねばならない。こうした基本情報が外部に知られると、本人に成り済ましての年金がだまし取られる被害が出ないとは言い切れない。

「本人確認を徹底する」と同機構は言うが、細心の注意を払って二次被害を防止してほしい。懸念は年金詐取ばかりではない。年金にかかわる個人情報は「名簿化」される危険性が高い。年金受給世代を狙ったさまざまな悪質な勧誘ビジネスや詐欺事件に巻き込まれる可能性もぬぐいきれない。

心配はマイナンバー制にも及ぶ。国民一人一人に生涯不変の番号を付け、納税実績や社会保障分野などの情報を結び付ける。個人の銀行口座にマイナンバーを付けることも進められる。

さまざまな生活の場面で使われれば、それだけ情報の集積が進む。行政事務が効率化されるというが、いったん今回のような情報流出事件が起きると、被害もいっそう深刻になる。米国では他人の社会保障番号を用いてクレジットカードをつくる成り済まし犯罪が多発しているし、韓国でもネットの闇市場で番号と名前などが売買される現状だ。

プライバシー侵害を回避しようとすれば、個人情報を集中させないことに限る。情報の分散管理が適切であるはずだ。マイナンバー制はその正反対だ。不正のリスクが高まることを強く懸念する。

23 特報 ＊11版S 2015年(平成27年)6月3日(水曜日)

本音のコラム

六つの事態

斎藤(さいとう) 美奈子(みなこ)

日本語で「事態」を含む熟語といえば、緊急事態、非常事態、異常事態くらいである。ところが今国会で政府与党が成立を目指す安保関連法案は「事態」の大安売り。

①武力攻撃発生事態とは「おいおい、ほんとに攻撃されちゃったぜ」状態。従来の政府見解で武力行使（反撃）が許されるのは、このように「実際に攻撃された」ときだけだった。それが専守防衛の意味である。

その伝でいくと、②武力攻撃切迫事態は「どう考えても攻撃されるにちがいないぞ」状態、③武力攻撃予測事態は「場合によっては攻撃されるかもしれないな」状態か。

以上は、個別的自衛権（自分ちの安全）にかかわる「事態」だが、集団的自衛権（よそんちの安全）に関係する「事態」はさらにややこしい。

④重要影響事態は「もしかしたら、わが家もヤバイことになるんじゃないか」状態、⑤存立危機事態は「このままだとわが家は絶対やられてしまうぞ」状態、⑥国際平和共同対処事態は「うちは安全だけど、まぁ付き合いもあるし」状態？

④と⑤の差は誰も（答弁に立った大臣も）わからないのに、④⑥なら戦闘の手伝い（他国軍の後方支援）ができ、⑤なら武器をもって戦闘に参加できる（集団的自衛権の行使）。①以外は攻撃されていない状態なのだ。それでも戦争に近づきたがる。そのほうが異常事態だよ。（文芸評論家）

筆洗

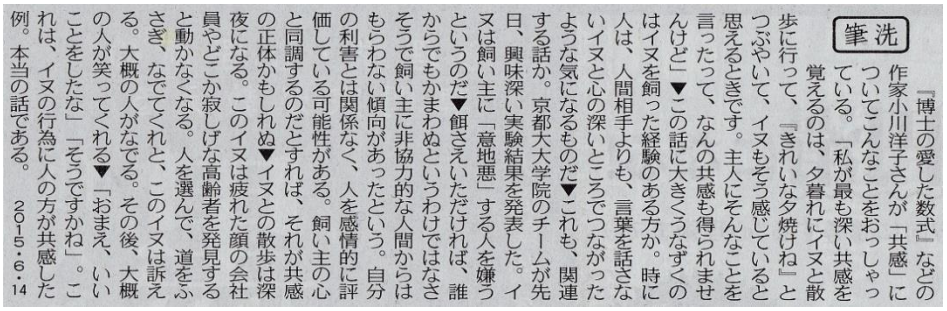
自動販売機というものは、論理的でなくては困る。代金を入れ缶コーヒーのボタンを押したら、コーヒーが出てくるのが当たり前で、サイダーが出てくるようでは困る▼法律も同じだろう。どんな行為があれば、どう判断されるのか、明確かつ論理的に示されなくては困る。条文を読んでも判断できない場合は解釈で明確にする必要がある▼さて安全保障法制とはどんな自販機だろうか。おとといの衆院憲法審査会には三人の憲法学者が招かれたが、長谷部恭男（やすお）さんは「どこまで武力行使が許されるようになったかはっきりしない」と言い、笹田栄司（ささだえいじ）さんは「読めば読むほど、どうなるか理解できない」と語った▼そして三人の参考人が二人とも集団的自衛権を行使できるようにする法案は「違憲」との見解を示し、小林節（せつ）さんは「この法案を承認したら、国会が立憲主義に反することになる」と警告した▼憲法という自販機に入れれば「否」と出る行為を、強引に「是」とする。そういう無理筋の論理で組み立てた自販機だから、どんな仕組みでどう動くか専門家にも理解しかねるようなシロモノになったのだろう▼「何が出るかはお楽しみ」というおもちゃの自販機もあるが、あれはちょっとしたスリルを楽しむ一種のゲーム機だろう。この国を遠い地での戦争に巻き込みかねぬ法制が「何が出るかは…」では、恐怖販売機だ。

2015・6・6

その“解釈”は明文化しておく必要があって，解釈が人によって(同じ内閣の首相と防衛大臣との間で)バラバラであっては話にもならない．

[2015年6月16日(火)]

○“安保関連法案”を巡る実りのない国会審議の中で，大いに救われたのは憲法学者たちの“これらの法案は違憲”とする判断であった．それにも拘わらず安倍政権は“砂川判決”まで引き合いに出して安保関連法案をゴリ押ししようとしている．最近になって『吉田敏浩・新原昭治・末浪靖司著：検証 法治国家崩壊 砂川裁判と日米密約交渉(創元社「戦後再発見」双書，2014.7.)』が明らかにしているように，砂川判決は米国による強引な圧力のもとで司法権を放棄せざるを得なかった屈辱的なものであり，そのような“負の歴史遺産”まで持ち出して苦し紛れの弁明をするようでは，いよいよ安倍政権も破綻を来したと云うことなのか．



筆洗

『博士の愛した数式』などの作家小川洋子さんが「共感」についてこんなことをおっしゃっている。「私が最も深い共感を覚えるのは、夕暮れにイヌと散歩に行って、『きれいな夕焼けね』とつぶやいて、イヌもそう感じていると思えるときです。主人にそんなことを言ったって、なんの共感も得られませんけど」▼この話に大きくうなずくのはイヌを飼った経験のある方か。時に人は、人間相手よりも、言葉を話さないイヌと心の深いところでつながったような気になるものだ▼これも、関連する話か。京都大大学院のチームが先日、興味深い実験結果を発表した。イヌは飼い主に「意地悪」する人を嫌うというのだ▼餌さえいただければ、誰からでもかまわぬというわけではなさそうで飼い主に非協力的な人間からはもらわない傾向があったという。自分の利害とは関係なく、人を感情的に評価している可能性がある。飼い主の心と同調するのだとすれば、それが共感の正体かもしれぬ▼イヌとの散歩は深夜になる。このイヌは疲れた顔の会社員やどこか寂しげな高齢者を発見すると動かなくなる。人を選んで、道をふさぎ、なでてくれと、このイヌは訴える。大概の人がなでる。その後、大概の人が笑ってくれる▼「おまえ、いいことをしたな」「そうですかね」。これは、イヌの行為に人の方が共感した例。本当の話である。 2015・6・14

右の東京新聞のコラム“筆洗”はこのような殺伐とした世の中における一腹の清涼飲料のように感じられた．わが家にも以前愛犬が居たので“イヌは飼い主に意地悪する人を嫌う”ことや“飼い主に非協力的な人間からは餌をもらわない”こと等には妙に合点がゆく．無理を承知で“砂川判決”に話を戻すと，“理不尽なことではあっても，権力者から強制されれば従わざるを得なかった(従ってしまった)”当時の最高裁長官は，イヌ以下であるなどと失礼なことを云うつもりはないが，職権を放棄したことにならないだろうか．

[2015年6月21日(日)]

○昨日，日本学術会議主催，日本地球惑星科学連合・地理学連携機構後援による学術フォーラム『われわれはどこに住めばよいのか？～地図を作り，読み，災害から身を守る～』に参加させて頂いた．フォーラムの趣旨は「東日本大震災発災から４年余りが過ぎ，復興は未だ道半ばで，現代の科学技術を以てしてもこのような大災害をなくすことはできないが，せめて災害についてよく知ることによって被害を軽減することはできないか．地形図や地質図，ハザードマップなどにはそのための情報が詰まっており，どんな地図情報があり，それからどう災害リスクを読み取ればよいか，また，人々が自ら地図を作ったり活用したりして災害から身を守る社会を実現するにはどうしたらよいかを地球人間圏科学の視点から考えたい」と云うことであった．右にプログラムを示すように提供された話題は多岐に亘っていたが，共通のキーワードは“ハザードマップ”であった．災害情報を市民に的確かつ判りやすく伝える上で，地図をうまく活用することは非常に重要なことで，異なる災害の様々な事例を見せて頂けたことは非常に良い経験であった．「地図と防災地図が未だ融合していない」「防災地図に人間尺度の導入を」「防災地図は完成品ではない！」等々の指摘も非常に的を得たものであった．一つ思い当たるのは，東日本大震災の際の大川小学校周辺地域で，住民や小

日本学術会議主催学術フォーラム

われわれはどこに住めばよいのか？

～地図を作り、読み、災害から身を守る～

平成 27 年 6 月 20 日(土)　13 時～17 時 00 分

主　催　日本学術会議
後　援　日本地球惑星科学連合、地理学連携機構
場　所　日本学術会議講堂　(東京都港区六本木 7-22-34、http://www.sci.go.jp/ja/other/info.html)
申込み　日本学術会議ウェブサイト(https://form.cao.go.jp/sci/opinion-0003.html) か Fax 03-3403-1260 にてお申込み下さい。参加費無料。定員 300 人。

東日本大震災発災から 4 年余り過ぎましたが、大きな痛みは続き、復興は未だ道半ばです。現代の科学技術でこのような大災害をなくすことはできません。しかし、災害についてよく知ることにより、被害を軽減することはできます。地形図や地質図、ハザードマップなどにはそのための情報が詰まっています。どんな地図情報があり、それからどう災害リスクを読み取ればよいか、また人々が自ら地図を作ったり活用したりして災害から身を守る社会はどうしたら実現できるかなどを、地球人間圏科学的視点から考えます。

プログラム

【総合司会】亀頭昭雄（鳴門教育大学生命環境系生物研究員／日本学術会議連携会員）
13:00-13:10　開会の挨拶・趣旨説明
氷見山幸夫（北海道教育大学名誉教授、日本学術会議第三部会員）
13:10-13:30「堆積物が教えてくれる大津波の痕跡」
佐竹　健治（東京大学地震研究所教授、日本学術会議連携会員）
13:30-13:50「火山と共存する日本人が向き合う災害」
中田　節也（東京大学地震研究所教授、日本学術会議連携会員）
13:50-14:10「地域の災害特性を地理院地図で理解する」
宇根　寛（国土交通省国土地理院企画部地理空間情報活用推進分析官）
14:10-14:30「災害リスク管理のための地質地盤情報の共有化－忘れられた国土情報」
伊藤　崇宏（独立行政法人産業技術総合研究所理事、日本学術会議連携会員）
14:30-14:40　休憩
14:40-15:00「分かりやすいハザードマップを作るための要件とは？」
森田　藍（法政大学デザイン工学部教授、日本学術会議連携会員）
15:00-15:20「地理情報と統計解析を用いた土砂災害の発生可能性の評価」
小口　高（東京大学空間情報科学研究センター教授、日本学術会議連携会員）
15:20-15:40「家や工場を建てる際には水害地形図で事前の検討を」
春山　成子（三重大学大学院生物資源学研究科教授、日本学術会議連携会員）
15:40-16:00「防災・減災につなげるハザードマップの活かし方－地理学の視点－」
鈴木　康弘（名古屋大学減災連携研究センター教授、日本学術会議連携会員）
16:00-16:20「ハザードマップの展開：最新情報と普及の実際」
寶　馨（京都大学防災研究所教授、日本学術会議連携会員）
16:20-16:30　休憩
16:30-16:55　ディスカッション
【司会】　林山祐輔（筑波大学生命環境系教授、日本学術会議連携会員）
16:55-17:00　閉会の挨拶
奥村　晃史（広島大学大学院文学研究科教授、日本学術会議連携会員）

申込、参加に関する問い合わせ先：日本学術会議事務局企画調整学術フォーラム担当
〒106-8555 東京都港区六本木 7-22-34　電話：03-3403-6295　E-mail p228@scj.go.jp

(背景は国土地理院２万５千分１土地利用図)

学校の教職員が津波の発生を知りながら適切な避難行動が取れなかった背景には，津波予測マップの存在があたかも完成品のように受け取られたからではないかと云うことであった．しかしながら一方において，これは以前に地図情報システム(GIS)がブームとなった時にも感じたことであるが，地図上に何かを表現すること自体はあくまでも手段に過ぎないので，基本的には災害研究を深く掘り下げ，その成果を災害予防に活かす努力が根底になければならないのではなかろうか．最後のディスカッションは，フロアから質問票を回収し，各パネリストがそれに対する補足説明やコメントを加える形式で行われた．「*ハザード*や*リスク*と云う用語が人によって，専門分野によって，まちまちに用いられており，とりわけ多くの研究分野が共同で行うフォーラムの場合には用語の定義を明確にすべきではないか」との趣旨の質問票を提出したところ，登壇者から丁寧なコメントがあって恐縮した．なお，当日の配布資料はごく一部のみであったが，後日，日本学術会議のHPに掲載されるとのことであった．

[2015年6月27日(土)]

○重松清氏の『希望の地図 3.11から始まる物語(幻冬舎文庫,2015.2)』を読ませて頂いた．重松氏は少年向けの作品が多い作家であるが，この作品もフリーライター田村章と共に東京在住の中学生光司が主人公である．本の裏表紙に記載された“あらすじ”をそのまま転載させて頂くと「中学受験失敗から不登校になってしまった光司は，ライターの田村章に連れられ，(東日本大震災の)被災地を回る旅に出た．宮古，陸前高田，釜石，大船渡，仙台，石巻，気仙沼，南三陸，いわき，南相馬，飯館……．破壊された風景を目にし，絶望せずに前を向く人と出会った光司の心に徐々に変化が起こる――．被災地への徹底取材により紡がれた渾身のドキュメントノベル」と云うことであるが，不登校になった光司の父親が大学時代の同級生だった田村に息子を引き合わせるところから始まる物語は，始まりからすでに感動的であった．出会い早々，田村は光司たちを秋葉原の“写真救済プロジェクト”活動現場に連れて行く．それは富士フィルムがプロジェクトチームを組んで，ボランティアの人たちと協力しながら，被災地で津波に呑まれて泥だらけになったアルバムの写真を洗浄して乾かし，写真から読み取れる情報と共に被災地に送り返す地道な作業であった．この最初の体験から，光司は次第に被災地のことが気になり始め，田村の取材旅行に同行することになるのであるが，光司を田村に託そうとする父親と，父親の思いをごく自然に受け止めようとする田村の信頼関係には素晴らしいものがある．取材旅行では何回にも分けて，様々な被災地を訪ねて回るが，津波災害から半年後の被災状況の凄まじさだけでなく，それぞれの地域で頑張っている人々と出会うことによって，光司は次第に津波災害の中に生きる人々の逞しさに自然にのめりこんでゆく．最後の取材旅行となった南三陸町での光司の述懐は特に印象的であった．「被災地を訪ねて，たくさんのことを知った．けれど，だからよかった，とは言わない．言えるはずがない．“よかった”という言葉が，胸の奥にたとえようのない苦みを残す．おまえのために津波がこの町を襲ったわけじゃないんだよ，バカ野郎――！　自分で自分を叱りつけた．右の拳を固めて，右頬を殴ってみた．ごめんなさい――．誰でもない誰かに謝った．津波で亡くなった人たちは，ゆるしてくれるだろうか．かけがえのない家族を津波に奪われた人たちは，思い出の詰まった我が家を失った人たちは，原発事故でふるさとを離れざるを得なくなった人たちは，どうなのだろう．被災者のことを思えば，不登校なんて――そういう発想も，やはり，自分勝手で傲慢なのだと思う．ごめんなさい――．何度も繰り返した．途中から自然と手を合わせていた．つぶった目から涙もあふれてきた．ごめんなさい――．ほんとうは，そうではない言葉をつかいたい．もっと大切な言葉が，絶対にあるはずなのに，それが見つからないのだ．……」結局，光司が被災地の風景や話を聞かせてもらった人たちから引き継いだリレーの*バトン*を誰に渡せば良いのか．田村は「一生をかけてバトンを渡す相手を探せばいい．その相手に巡り合うための長い旅が，人生なんだよ」と諭してくれる．最後に，田村は光司と行動を共にした取材旅行の感想や被災地のその後の状況を伝えるために，石巻から光司に手紙を書く．光司と別れて2ヶ月後，すでに正月を迎えていた．その中での一部を以下に引用させて頂きたい．「石巻地区の成人式の会場にはテレビ局のカメラマンや新聞記者が何人か来ていた．予言しておく．明日の全国紙の朝刊や，今夜の全国ネットのテレビニュースは，“被災地の成人式”の様子を大々的に報じる．震災で亡くなった同級生の遺影とともに式に出席した新成人の話や，復興に向けてがんばることを誓う若者の話が，いくつも紹介される．しかし，その中に石巻地区の成人式の話は出てこないはずだ．(途中略)　なぜか．あえて言う．少なくとも，この会場での成人式は，とてもではないが，厳粛な式典からはほど遠かった．いや，厳粛以前に，最低限の慎みすらなかった，と言わざるを得ない．私語が絶えない．ヤジが飛ぶ．式典の途中で立ち歩く連中が何人もいて，震災で亡くなった人たちへ黙祷を捧げるときでさえ，笑い声が上がっていた．これではとてもニュースで報じるわけにはいかない．(途中略)　けれど――．悪目立ちをして大声をあげていた連中は，じつは厳粛にしていると悲しみに押しつ

ぶされそうなので，わざとバカ騒ぎをしていた，という可能性だってある．それは買いかぶりなのかもしれない．たぶん，買いかぶりなのだろう．ただ，その想像の余地だけは残しておきたい．悲しみのあらわし方は涙を流すことだけではないんだ，というのも忘れずにいたい．（以下略）」同じ時期に同じ被災地を歩いていたはずであるが，重松氏の被災地をやさしく見守ろうとする態度には，本当に頭が下がる思いがしている．

2015年6月27日　　文責：瀬尾和大